

柏崎 幸乃

さん

かしわざき ゆきの

優秀賞

中条中学校 3年



自分の言葉で

画像を生成したり、曲を作ったりなど、様々な分野で活用できるAIは、今や会社や学校などでごく身近な存在となっています。私自身も、日常生活においてAIを頼る場面は多くあります。ですが私は、ある出来事をきっかけにAIとの向き合い方を見直しました。

私は一年生の冬から、生徒会執行部の一員として活動していました。生徒会活動の中心となる組織なので、人前に立つて話す機会が多くありました。しかし私は、先生や仲間たちが聞いたときにどう感じるかを気にして、自分が考えた文章に自信をもつことができませんでした。そこで、内容を打ち込めば完璧な文章を作ってくれるAIに、話す内容を考えてもらっていました。そんな私は、さらに生徒会活動に熱が入り、生徒会長候補として生徒会役員選挙に出馬することに決めました。選挙では、自分の公約や考えを全校生徒に伝えるための立会演説会があります。それは全校のみんなに自分を知ってもらうための大切な機会です。今まで通り、AIを使って文章を考えてもらいました。やっぱりAIは完璧だな。これならみんな納得してくれるに違いない。そう思った私は、その文章を演説の原稿にして、発表の練習を重ねました。そうして迎えた、立会演説会の前日リハーサル。本番を想定した形で、一人ずつが原稿を見ずに演説をしました。何回も練習したはずなのに、言葉に詰まってしまう、結局、原稿を見ながら話すことしかできませんでした。リハーサルの後、教室で一人、思い悩みました。人前で話すことには慣れているはずなのに。AI

が作った完璧な文章なのに。なんで自信がもてないんだろう。思い詰めて天を仰いだとき、ふと教室の正面に掲げられている教育目標に目がいききました。「考える」。普段は気にも留めていない言葉でしたが、その時はなぜか目が離せませんでした。考える、か。私は「考える」という行動をAIに頼って怠っていたんだ。ならばこの原稿は、自分の言葉じゃない。それは本気で戦っていることにならない！帰宅した私は、パソコンに打ち込んであった原稿を全て削除して作り直しました。今度はAIを使わずに、自分の言葉で。

いよいよ迎えた本番当日。リハーサルでは息が止まるほど緊張していたものの、その日は自信に満ち溢れた気持ちで臨むことができました。自分の番になり、演説台に立つ。自分でも驚くほど冷静で、ただ思いを伝えることだけに専念できました。演説後、色々な先生方からは「昨日のリハーサルとはまるで違う演説だった。」友達からは「私も共感した！」「かつこよかった！」と声をかけてもらいました。ああ、これでよかったんだ。これがよかったんだ。自分から出る言葉だからこそその魅力があるんだ、と気づきました。そしてもう一つ。私は、演説中の場の空気、演説台から見る先生方や仲間の表情を鮮明に覚えていました。以前までの私は、AIの文章を暗記して読み上げることだけに必死でした。ですが本番では、一人ひとりの顔を見て、間違えてもいいからとにかく伝えることを意識しました。その少しの意識の違いで伝わり方は変わり、自分から見る景色さえも変え

ることを知りました。そこでようやく、AIに頼りすぎていた自分に気づいたのです。

今では、社会の一員として当たり前存在するAI。だからこそ、皆さんも一度、AIとの向き合い方を考えてみませんか。確かにAIは、こちらの言いたいことを汲み取り、完璧な文章を作ってくれます。しかしそれは、自分の内面から出た言葉ではありません。自分が感じたことを、自分の言葉で書いたり、話したりすることが、自分の魅力を引き出す一番の方法なのだと私は思います。皆さんにも、どんな時も自分にしかできない表現を大切にしてほしいです。私たちは、AIの便利さに甘え、自分を見失っては いけません。私はこれからも、自分の頭で考え、自分の言葉で生きていくことを、大切にしていきます。

(原文のまま掲載しています。)

— 講評 —

AIにより、高度な文章や画像がつくられますが、どこか味気無く、主張に確固たる芯がないと感じます。私が思っていたこのような感覚を見事に描いてくれました。

実際の体験を通して自分の頭で考え、自分の言葉で、生きていく大切さ、これを心に刻んだ柏崎さんには、今後さらには人間らしく、地道に生きていって欲しいと思います。